キリストのかたち（7）キリストにあって歩む　　コロサイ２章６～１０節

クリスチャンがよく使うことばに「キリストにあって」ということばがあります。今日の中だけでも「キリストにあって歩みなさい」(2:6)、「キリストのうちに根ざし」(2:7)、「キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています」(2:9)、「あなたがたはキリストにあって満たされているのです」(2:10）というふうに使われています。

「キリストにあって」、このことばは聖書の教えを理解するためにとても大切なことばなのですが、これには一体どのような意味があるのでしょうか。今日はこの言葉から三つのことを学びましょう。第一は「キリストを受け入れること」、第二は「キリストにとどまること」、第三は「キリストにあって歩むこと」です。

1)キリストを受け入れること

6 節に、「このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのですから、彼にあって歩みなさい」とあります。「キリストにある」ことは、第一にキリストを受け入れることから始まります。

多くの人にとってイエス・キリストは自分とは無関係な遠い存在と考えられています。キリストとはどういう人か？　との問いに今から二千年前に愛の教えを説いたが、当時の宗教家のねたみを買い、死に追いやられた不運な人として受け止められているようです。ただ人々は、イエスを神の子として受け入れませんが、その教えには賞賛します。聖書の中でキリスト教に反対する人たちでも、「素晴らしい教えだ。だれからも聞いたことがない」と言って誉めています。ところが、多くの人はイエスが病人をいやしたり、悪霊を追い出した部分は「作り話」であると言って受け入れません。イエスの教えたことは受け入れるのに、イエスご自身やイエスがなさったことは受け入れないのです。イエスの教えられたことと、なさったこととを分けてしまうのです。しかし、聖書を読むとイエスが教えられたこととなさったこととは結びついていて、それを分けることはできないことがわかります。ただ私たちは教えについては寛容に受け入れ、それだけで人生を乗り切れるように勘違いしてしまうところがあります。昔、西宮市に住んでいた時に町中華屋さんがありまして何回か食べにいったことがあります。そのお店にはテーブルから壁から店のいたるところに格言、ことわざ、教訓のようなことが書いてあったり、書いた紙が貼られていました。人生をどう乗り越えたら良いのかということを真面目に探しておられるんだなと思いました。

さてイエスは、病人をいやし、悪霊を追い出し、水をぶどう酒に変え、ガリラヤ湖の水の上を歩き、その嵐を鎮めました。死人さえも生き返らせました。聖書の中のそのような箇所を読んで、「そんなことは信じられない」と言って、かえってイエス・キリストから遠ざかってしまう人がいるかもしれません。ただ考えてみますともし、イエス・キリストが何の奇蹟もできないお方であったとしたら、どうして私を救うことができるのでしょうか。たとえ優しいお方であったとしても私の救いには何の関りもないことになってしまいます。

ですから、イエス・キリストを受け入れるとは、「イエスの教えはいいなあ」とそれに賛同することだけではなく、イエスが私たちの救いのために成し遂げてくださったみわざを受け入れることでもあるのです。十字架が私の罪のためであり、復活が私を救うためのものであることを受け入れることです。6 節に「あなたがたは、このように主キリスト・イエスを受け入れた」とあるように、イエスを私の「キリスト（救い主)」として、私の人生の「主」として迎え入れることなのです。

そのようにしてキリストを受け入れた人は、キリストにも受け入れられ、「キリストのうちにある人」となるのです。

2)キリストにとどまること

イエスはコロサイ 2:8 で「あの空しいだましごとの哲学によって、だれかの捕らわれの身にならないように、注意しなさい。それは人間の言い伝えによるもの、この世のもろもろの霊によるものであり、キリストによるものではありません。」と言われました。当時、コロサイの教会にはキリストを受け入れたの

に、キリスト以外のものに惹かれていってキリストのうちにとどまり続けなかった人たちが大勢いたのです。そのひとつがグノーシス主義の教えでした。8節に「あの空しいだましごとの哲学によって、だれかの捕らわれの身にならないように、注意しなさい。それは人間の言い伝えによるもの、この世のもろもろの霊によるものであり、キリストによるものではありません。」とありますが、ここで「だましごとの哲学」と呼ばれているのが、グノーシス主義という宗教でした。グノーシス主義は、基本的には古代神話に基づくものですが、人々に受け入れられるために哲学的な装いをしていたのです。「グノーシス」とはギリシャ語で「知識」という言葉で、グノーシス主義の人たちは、人はこの宗教によって天的な知恵に到達し、救いを得ることができると説きました。クリスチャンの中には、キリストの教えだけでは足らない、教会の教えは知的ではないと感じて、グノーシス主義のみせかけの知恵や知識に惹かれて、キリストから離れ、教会から離れる人がありました。グノーシス主義の人々は「隠されたもの」、「奥義」、「知識」、また「満ち満ちたもの」といった言葉を良く使いました。それでパウロも、コロサイ人への手紙の中で同じ言葉を使って、キリストこそ「神の奥義」であり、キリストのうちにこそ「知恵と知識の宝」がすべて隠されていると教えたのです（2:2－3）。

7節に「キリストの中に根ざし、また建てられ、また、教えられたとおり信仰を堅くし、あふれるばかりに感謝しなさい」とあるように、キリストにとどまるとは、浮き草のようにこの世の流れに流されることなく、しっかりとキリストに根ざすことです。間違った教えに振り回されることなく、キリストを真理の土台としてその上に自分自身を築きあげていくことです。

グノーシス主義は時代とともに変化してきましたが、共通していることは、旧約聖書の神は究極の神ではないということ、イエスは天の知識を教える教師にすぎないというのです。人は、十字架によって贖われ、赦されなければならないほど罪深い存在ではない。ただ無知なだけで、「知識」（グノーシス）を得ることによって神になることができると教えました。これは明らかに聖書に反する教えですので、教会はグノーシスの教えと戦い、それをしりぞけました。しかし、近年、グノーシス主義は形を変えて再び息を吹き返してきています。それはひと昔前にはニューエイジ音楽やポストモダニズムと言われたものです。それらは、知的で神秘的なものとして心に映るのです。徐々に教会の中に入り込み、救いのメッセージを別のものに変えようとします。ですから、コロサイ1:23に「あなたがたは信仰に土台を据え、堅く立ち、聞いている福音の望みから外れることなく、信仰にとどまらなければなりません。」と勧められているように、正しい福音から外れることなく、キリストにとどまっていたいと思います。

3)キリストにあって歩むこと

「キリストにあって」とは第一にキリストを主として受け入れること、第二に真理であるキリストのうちにとどまることでした。第三は、キリストにあって生きることです。6節に「このように、あなたがたは主キリスト・イエスを受け入れたのですから、キリストにあって歩みなさい。」と教えられています。ここで「歩く」というのは、日常の具体的な生活を意味しています。グノーシス主義では、日常の生活をほとんど気にかけませんでした。どんなにいいかげんな生活をしていても、かまわなかったのです。宗教生活と日常生活が切り離されていたのです。宗教は単なる頭の中での知的な作業といったもので、実際の生活には何の変化ももたらさなかったのです。しかし、キリストを信じる信仰は違います。それは、日常生活を変えていくものです。クリスチャンの信仰とは、自分の生活に満たされないものがあるので、それから逃避するために宗教行事や活動に没頭するというものではありません。クリスチャンはなにをさておいても礼拝を守り、祈りを大切にしましますが、その礼拝は私たちを心の深みから造り変えるもの、その祈りは私たちの生活を整えていくものです。信仰と生活は別々のものではありません。信仰とはキリストにあって生活することであり、キリストにある生活とはキリストへの信仰によって日々を歩むことなのです。ですから礼拝を守り、祈りを大切にしているなら人によって違いはあっても必ず何か自分の生活に変化が起こるはずだと思います。

初代のクリスチャンは、信仰と一致した生活をしていました。人々がクリスチャンを嫌ったのは、その信仰のためばかりでなく、クリスチャンのきちんとした生活態度のゆえでもあったのです。慎ましやかで誠実な生活に励み、どの人に対しても差別無く接したクリスチャンは、その真面目さのゆえに、世の中の人たちから、うっとうしく思われました。しかし、彼らは妥協せず、信仰を貫き通しました。そのことで悪く言われることをむしろ誇りとしました。今でも他の宗教の人は、たとえば「仏教徒のくせに」などと言われませんが、クリスチャンが何か悪いことをすると、「クリスチャンのくせに」と言われてしまいます。それは前向きにとらえるならクリスチャンが、期待されていることのしるしでもあるのです。

「キリストにあって歩く」とはキリストに信頼して歩くことです。日々、キリストの力によって助けられて歩く歩みです。キリストに手を引かれて歩む歩みです。今まで到底出来ないと思っていたことが、キリストによってできるようになる。また、今まで何をするにも自分を中心にしていた者が、たとえ小さなことでも「キリストのために」することが喜びとなる。そんな歩みです。それはまた、キリストが共に歩んでくださる歩みです。「キリストにあって歩む」、ここにこそ本当の平安があり、満たしがあり、感謝があります。

キリストを受け入れる招きに応えた私たちは、次にキリストにとどまり、キリストにあって歩く招きにも、感謝しながら応えていこうではありませんか。